

特 別 寄 稿

wam 第 15 回特別展「日本人「慰安婦」の沈黙～国家に管理された性」、開催中
 渡辺美奈（wam 事務局長）

wam では 2017 年 8 月から 1 年間の予定で、日本人「慰安婦」に焦点をあてた特別展を開催しています。日本人で「慰安婦」にされた女性たちがいたことはわかっていますが、証言をした女性は極めて少なく、その被害実態や規模は明らかではありません。wam では、この「沈黙」こそが鍵だと考えました。日本という国は、女性が自ら性を管理されることを選んだかのように見せるシステムをつくり、社会は性暴力の責任を女性に転嫁して差別してきました。日本軍の「慰安婦」にされた女性たちの「沈黙」は、今も差別が継続していることを示しています。このような認識のもと、私たちは近代公娼制のなかに日本軍「慰安婦」制度を位置づけ、ごくわずかな本人の語りと、膨大な兵士たちの戦記から、日本人「慰安婦」の被害とは何かを伝えようと試みました。

展示室 1 では、幕末の開港、明治維新から戦後の売春防止法制定までの流れを年表で示し、近代化を推し進めた日本政府が真っ先に取り組んだ「公娼制度」の実態は、行政が統制した人身売買であり、「慰安婦」制度を頂点に、軍隊の存在がいかに性売買に深く関わっていたかを伝えたいと制作しました。展示室 2 の大壁では、「記録された日本人『慰安婦』」と題して、兵士の手記や公文書、目撃証言などから、「慰安婦」にされた日本人女性が「いた場所」を地図に落としました。この作業では、「日本の戦争責任資料センター」による国会図書館の調査結果や、これまで発見された公文書を主な手掛かりにしました。日本国内の慰安所も地図には含めましたが、高麗博物館と連携することになったので「産業慰安所」は入っていません。そして地図の対面には、少数ながらも 1970 年代以降に週刊誌や書籍で実名／匿名でその体験が記された女性たちの語りをパネルにしました。そして、もう一つのテーマである戦争末期から敗戦後の引揚げ時に日本の女性たちが受けた性暴力、占領軍のために日本政府がつくった RAA という名の慰安所の実態を伝えるパネルに繋がっていきます。

wam ではこれまで 14 回の特別展を企画・開催して、アジア太平洋各地の女性たちの被害の実態とその特徴を伝えてきました。地域に焦点をあてた最初の展示は 2007 年の「置き去りにされた朝鮮人『慰安婦』」展でしたが、10 年を経て、「置き去り」という被害のみならず、日本による朝鮮半島の植民地支配の構造にくみこまれた「慰安婦」制度とその被害について特別展を開催したいと考えています。高麗博物館のみなさまには、今回の交流をきっかけに、ぜひこの「植民地支配と朝鮮半島展」にご協力をいただきたいと wam 一同願っています。これからもどうぞよろしくお願ひします！

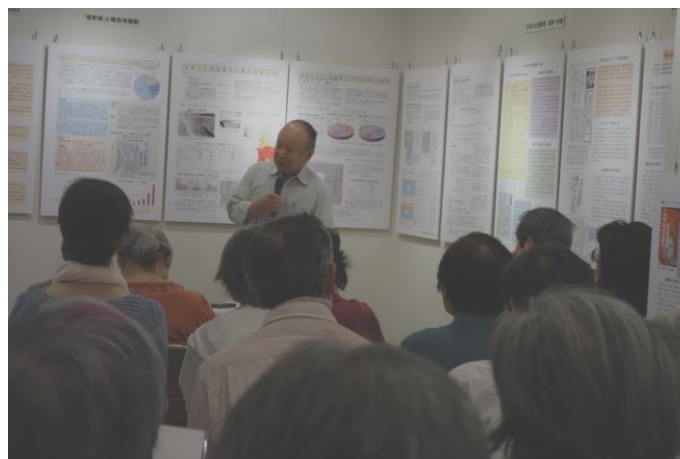
第15回特別展 日本人「慰安婦」の沈黙～国家に管理された性

会期：2017年8月5日（土）—2018年7月末予定



*高麗博物館の企画展「朝鮮料理店・産業『慰安所』と朝鮮の女性たち～埋もれた記憶に光りを～」2017年8月30日-12月28日の期間中は相互来館割引を実施します。

好評のうちに2017年企画展「朝鮮料理店・産業『慰安所』の朝鮮女性たち」開催中



第1回ミニ朝鮮女性史講座（10月10日） パネルの前で講演する樋口前館長

8月30日から始まった展示「朝鮮料理店・産業『慰安所』と朝鮮の女性たち」も、開催からはやくも2カ月がたった。展示が始まったばかりの頃にはハンギョレ新聞東京駐在の記者が来館し、産業「慰安所」の存在を初めて知ったとかで熱心に話をきいてくれて、北海道まで取材にいったということもあった。

これまで、来館者の人数が多いとは言えないが、マスコミ報道が少ないなかチラシ配布だけで来館する人が多いということが今回の展示の特徴と言えると思う。それだけに熱心な方々が多いということだろう。10月22日の台風が来るという悪天候の中でもわざわざいらしてくれた方もいるほどだった。

先日いらした韓国高陽市披州の生協の方々には、高麗博物館会員の岩橋春美さんの通訳のもと、パネルの解説をし、その上多くの寄付もいただいた。また、韓国KBSでの放送や東亜日報のネットニュースに報道されるなど韓国マスコミの関心が高いのも予想外だった。長年軍「慰安婦」の研究をしている韓国中央大学教授の李那妍さんも来館されるなど、研究者が訪れてくれるのも今回展示の特徴ではないか

と思う。

このほか、大阪や北海道など遠方から訪ねてくる方々も多い。このなかには軍「慰安婦」について長年活動されている専門家も多く、今回の展示で産業「慰安所」もあったということ知ったと話される方もいた。さらに付け加えると、来館される方のほとんどが図録を購入される。パネル枚数が多く1回の来館だけでは読み切れないということもあるかと思うが、初めて「産業慰安所」をテーマにした展示だからというのが1番の理由なのではないかと思う。

これから12月28日まで、余すところ約2カ月。来館者の人数に関わらず、熱心な来館者の期待に応えられるようにしたいと思っている。
(大場小夜子記)

図録 700円
参考文献や西田秀子さんの寄稿なども掲載。



❖ 第2回ミニ朝鮮女性史講座

資料代：600円(入館料も含め)

ご予約ください03-5272-3510 / e-mail: kourai@mx7.ttcn.ne.jp 会場：高麗博物館展示室

第2回 講座名：各地の朝鮮料理店・産業「慰安所」の実態

日程：11月28日(火) 13時30分～16時

講師：ゲスト 西田秀子さん(地域史研究者) 「北海道の労務「慰安所」を調査して」
朝鮮女性史研究会会員

2017 韓日歴史研究者共同学会のフィールド・ワークに参加して

紺野貴美子 (高麗博物館会員)

8月4日(金)から「韓日歴史研究者共同学会」に初めて参加し、二日目のフィールド・ワークにも参加しました。美味しい大根スープの朝ごはんを頂いて、8:40貸切りバスに乗り込み、フィールド・ワークに出発。一番目は宿泊ホテルからまっすぐ川の方へ向かいました。錦江という大きな川がかつては群山港から付近一帯で収穫した米を日本に運んだそうです。各地で集めた米を港まで運搬する鉄道跡の線路も少し残っていました。一年掛けて作った米のほとんどを持って行かれる農民たちの気持ちはど

んなだったでしょう。

次に「ふじ農園の貯水池」に行きました。貯水池というにはとても広く湖のようでした。一面に緑の藻のようなもので覆われている貯水池をバックにしてみんなで記念写真を撮りました。



群山大学博物館に行きました。それほど大きな博物館ではないけれど、もっと時間に余裕があればゆっくり展示を見られたと思います。博物館開館 30 年の記念の美しいポストカードセットを頂きました。博物館を出てバスに向かうだけでも、とにかく蒸し暑くて冷房の効いた屋内や車内に入るとついフウツとため息が出てしまいます。

看護学校と病院の横道を入ったところに「韓国の近代保険衛生の父」と言われる李永春（イ・ヨンチュン）の家がありました。もとは群山の農場主熊本利平の別荘であったとか。書棚には本もたくさんあり、大切に保存されているようでした。今はまわりの木々の陰になっているけれど、少し高台に建っているこの家からは近所がよく見渡せたのだらうと思います。



またバスに乗り移動し小学校につきました。たら細い道を案内について行くと、小公園のようなところに五重の塔や石像などが並んでいました。またという日本人が収集したものだそうで、戦後日本に持ち帰ることもできずにここに置かれたものようです。また、すぐ近くに朝鮮各地から集めた宝物を入れて置く三階建の蔵もありました。人間は財力と権力があれば何でも自分のものにして独り占めしたいんですね。

フィールド・ワークの間、あちらこちらで見かけた百日紅（さるすべり）の濃い桃色の花と、日本の田舎と同じ田んぼの景色が思い出されます。そして、これからも日韓の交流が絶えることがないように私たちがしっかりしなければと、再度心に刻みました。

編集後記

○企画展準備から開催と忙しく会誌第 9 号は 4 ページですが 3 月の 10 号を期待してください。Wam の渡辺さん、お忙しい中ありがとうございました。(YW)
○11 月 11 日金富子さん講師による講演会は 110 人もの参加がありました。予想以上の参加者で、展示室は熱気に溢れ、暑くて 11 月にもかかわらず冷房を入れたほどです。それにしても、公娼制度によって朝鮮に残した爪痕の深さをつくづく感じました。

